

幼年文学にみるジェンダー

——育児の描かれ方から考える

宮下 美砂子

1 幼年文学におけるジェンダーの重要性

二〇二〇年、世界を襲ったパンデミックは、社会にはびこるジェンダーの問題を改めて浮き彫りにした。一方で、優れた女性リーダーたちの施策は高く評価され、男性原理の「神話」の終焉と、未来を担う子どもたちを勇気づける「新しい物語」の誕生を期待させる。では、現状の児童文学におけるジェンダーはどのように描かれているのだろうか。

横川寿美子の『初潮という切札』（JICC出版局、一九九一年）は、児童文学に内在するジェンダーの問題に鋭く切り込み、大きなインパクトを与えた。『日本児童文学』においても、一九九二年五月号で「児童文学とフェミニズム」、一九九五年二月号で「女の子・男の子の描かれ方」という特集が生まれ、児童文学におけるジェンダーに対する意識が高まった。絵本分野でも、藤枝濤子「絵本にみる女（の子）像・男（の子）像」（『講座 主婦I 主婦はつくる』汐文社、一九八三年）を端緒に、ジェンダーの視点

を用いた分析や研究が蓄積されてきた。

児童文学に登場する子どもたちの性のあり方は、社会における「理想的」なジェンダーロールや、大人側の欲望を反映して表象される。こうした見方は、本誌の大部分の読者の方々にとっては、もはや自明のことであろう。近年では、既存の二項対立のジェンダー役割や、異性愛を前提とするセクシュアリティを超越した児童文学作品も続々と登場している。

一方で、児童文学のなかでも、いわゆる「幼年文学」とカテゴライズされる作品群が、こうした潮流から置き去りにされている印象が拭えない。宮川健郎は、年齢が上の層が読むヤングアダルト（YA）文学には、新しい作家や作品が出てきて盛んである一方、小学生や小学生より少し下の読者向けの本については、話題になる作品が多くない状況が、一九九〇年代初頭から続いていると述べている^{註1}。児童文学のなかでも、絵本とYA文学の読者層の核は、それぞれ性自認を獲得する時期の幼児と、第二次性徴が発現する